

想われし妻—フリードリヒ作《窓辺の女性》の画面構成をめぐって—

杉山あかね（インディペンデント・スカラー）

アトリエの窓辺に佇む妻を描いた《窓辺の女性》（1822）は、フリードリヒのメルクマール、後ろ向き人物像が室内に描かれた唯一の作品であるため、人物像と窓というロマン主義的モチーフによって多くの研究者を惹き付けてきた。とは言え従来の研究では、人物像を画面構造との関わりの中で綿密に分析することはなく、また画家の死生観やロマン主義的な憧憬といった概念の表出として作品を見る解釈が主流であった。しかし画家が制作中に妻に送った数通の手紙との関連を考慮すれば、本作品の解釈は、普遍的概念に留まらない画家の個人的心情に即して行われるべきであろう。こうした観点から本発表は、後ろ向き人物像が建築要素と共存する造形的特質と、私的心情の表出という主題の特殊性とを照合することで、フリードリヒ絵画における本作品の意味を再検討するものである。

画面の構成を詳細に分析すると、上下二段になった窓のうち、画面の中央に位置した下の窓が複数の手段によって強調されていることが分かる。室内描写は明暗に応じて、画面を対角線で区切った左上半分で壁面の平面性を、右下半分では空間の奥行きを示しているが、この二要素の競合は下の窓周辺に集約されている。相反するこれらの要素の集約、厳格な水平・垂直要素による幾何学的構成、また人物像との明暗の対比は、下の窓の画中所ける中心性を明示している。こうした中心性の強調は鑑賞者の視線を画面の内奥へと誘導するが、その反面、十字の棧を持つ上の窓と画面左のニッチの側壁は鑑賞者の視線を遮り、画面の平面性を強調している。このような構成からすれば、従来は未完成とされた女性のボリュームを欠いた下半身も、上の窓に対応して画面の平面性を強調する意図的な描写と考えられよう。身体の上下を質的に描き分けることで後ろ向き人物像は、本来の空間創出と視線誘導の機能に加え、空間を削減し視線を留まらせる機能を果たしている。最終的に本作品の画面構成には、急速な侵入と揺るぎない静止という二律背反した特質が指摘できるだろう。

本作品の制作中、フリードリヒの妻はマイセンに滞在しており、不在であった。彼女にフリードリヒがドレスデンから送った手紙は、妻を想う心情と画家を取り巻く静寂が本作品誕生の原動力であることを示している。こうした内容は画面構成の動と静、すなわち侵入と静止という二つの本質として具象化されたといえよう。アトリエは画家の精神世界を表し、後ろ向きの妻の像は彼女の具体的な相貌ではなく、画家の妻に対する恒常的なイメージを写したものとして理解されねばならない。それ故この人物像は後ろ向きの匿名性を有するといえ、フリードリヒ絵画に一般的な普遍的表象ではなく、個人をある普遍的な時間の流れの中で描き留めた、いわば心象肖像画としての解釈を促すものといえよう。したがって《窓辺の女性》はロマン主義の時流に乗った時代の作品であると同時に、厳格な構成と人物像との関わりの中で画家の内面を最も端的に開示した、フリードリヒ唯一の「後ろ向きの肖像画」と呼べるのである。